

〈書 評〉

ヨシオ セトグチ (カリフォルニア大学ロスアンゼルス校) 編
ルース ローゼンフェルダー (カリフォルニア大学ロスアンゼルス校)

加倉井周一 (帝京大学) 訳

小児切断と義肢

大川嗣雄 (横浜市立大学)

UCLAの小児科医で、小児切断プロジェクトの所長である Yoshio Setoguchi 博士ら編の「小児切断と義肢」が、帝京大学の加倉井周一先生の翻訳によって出版された。

この本は、アメリカ合衆国での小児切断プロジェクトの25年の歴史の中心的存在である Setoguchi 博士らの手になった本である。さらに、訳者は我が国の小児切断のリハビリテーションを体系化した加倉井先生である。今まで殆ど作られていない小児切断とそのリハビリテーションに関する最初の教科書ともいえるであろう。全ての整形外科の教室、小児切断に関わりを持つ人達の座右の書となり得るものである。内容は、序論を含む10頁のまえがきからは

じまる。(ここに、アメリカでの小児切断に対する取り組みの歴史が簡潔に述べられていて興味深い) 次に本文は、Part I 訓練による治療、(この原文は何であったのであろうか) Part II の年齢別治療方針の二部から成っている。

Part I の訓練による治療は、第1章医療的ケア、第2章先天性四肢欠損の原因、第3章分類とつづき、切断術などの問題を述べ、第10章義手、第11章義足で終わっている。この第1部は、小児切断から義手、義足に至る小児切断の総てを網羅した総論である。この中で Setoguchi 先生は、豊富な臨床経験を基に、先天性四肢欠損児の分類に完全なものはないと言いきっており、また切断術や先天性欠損児の手足の処置において、義

手や義足へのより良い適合を前提としたきめ細かい配慮が述べられており、大変勉強になった。

Part II の年齢別治療方針では、誕生、誕生から18カ月までの2章にはじまり、12歳から18歳までの章に終る6章と感想、研究プログラムの2章の8章から成っている。特に先天性四肢欠損児の誕生からの詳細なプログラムは、全く他に類を見ない。先天性四肢欠損児に遭遇した医師は、先ずこの Part II を繙いてほしいと思う。先天性四肢欠損児の具体的な方策が全て語り尽くされている。また、最後に特別付録として Setoguchi 博士と訳者の対談があるが、これも小児切断を理解するのに有益である。訳も大変読み易い日本語であるが、日本語、英語ともにミスプリントがあるのが気になった。

終りに、このような地味(?)な本を出版して下さったパシフィックサプライに深甚の謝意を捧げたい。

(A5変形、頁256、¥6,800、パシフィックサプライ 刊)